

太陽と教室 サンプル

八月二十日 午後二時

暑い夏は嫌いじゃない。真昼の灼熱の太陽の下、体中から吹き出す汗を、時折風が爽やかに撫でさすっていくのを味わえるなら。

☆刻々と進んでいく時間が章となっている。以下、本文より抜粋

九月二日 午前六時十分

決行日。早くに目が覚めた。遠足の日の小学生のようなものかな。俺は口元を歪めた。今日も暑くなりそうだ。夏はまだ終わらない。

悲鳴、一撃。爆音と共に担任教師が黒板に叩きつけられ、硝煙の匂いと煙と、何かの破片が飛び散り、子ども達がさらに悲鳴を上げる。

「静かにしやがれ！ 皆殺しにするぞ！」
俺はあらん限りの声で叫んだ。

九月二日 午後一時二十五分

息詰まる沈黙だ。

「さて、そろそろゲームを始めようか」

「やれやれ、こんなことにもお手本が必要なのか……」俺は捕まえている少年に小さな声で指示した。「君、意味はわかったろ、脱げ、すぐに」

「ハ、ハイ」と小さな震える声で返事しやがった。そして、震える手で不器用に半ズボンを下ろす。小さな性器が露わになった。

「何でこんなことするんだよ！ 一体……」

「その子の隣の二人、離れたまえ」

どこのクラスにでもある文房具が、もちろんこのクラスのロッカーにもある。俺はロッカー

のそばの一人に指示して、マジックを持たせた。こいつで、全員にナンバーを振ってやる。先程から捕まえているこの子には、栄えある一番をやることにしよう。俺は、ケツと太ももに大きく太く、「1」と書いた。

「そんな……できない……」

消え入りそうな声で、七番は抵抗したが、俺は無言で頭に拳銃をゴリりとこすりつけた。

九月二日 午後二時三十八分

目をそらす者は誰もいない。むしろ皆固唾を飲んでショーを見守っている。そして、何人かの性器は勃起していた。俺は、彼らにも自分でいじるように指示した。異常が正常を

いたいけな子ども達を、服従させ、汚けがしているこの状況が、俺を高ぶらせる

「飲み込め。吐き出したら殺す」

そして俺は…